

我は君のもの、御声のままに ヨハネ10:1~10 / 李正雨師

羊は聖書で頻繁に取り上げられている動物の1つでもあります。主に神様のことと関わりがある動物として書いてありますが、捧げ物の代表的な動物です。出エジプト記では、この羊の血によって死を免れる事件が書かれており、イザヤ書では、羊のたとえを通してメシアについて説明しています。詩編では、神の民を羊の群れとして表現しており、新約聖書でもイエス様に従っている人々を羊の群れと表現しています。ですから、聖書での羊は良い動物、キリスト教を代表している動物と見ることができます。今日の福音書でもこの羊が登場しています。より正確に言えば、今日の福音書での羊は、イエス様は誰なのかを示すために書かれているのです。イエス様はご自分を羊飼いであると言われます。そして私は、この言葉がイエス様のアイデンティティ、イエス様を最もよく紹介している言葉だと思います。

一般的に人々は、自分を紹介する際には、自分がしていることや自分の身分などを言います。またなるべく自分に対して公的なことを話すことによって、相手に自分のことがよく現れるようにします。そして自分を紹介する場所によって、少しずつ自分の紹介が変わることもありますよね。例えば、私を紹介するとしたら、私は牧師であり、宣教師として来日して、飯能ルーテル教会で牧会していますと言うでしょう。必要によっては、「私は誰々の父です」と紹介する時もあるでしょう。おそらく、皆様も私と同じようにご自分を紹介するだろうと思います。そして、この紹介によって、皆様は自分が誰なのかを示すことができ、相手は皆様が誰なのかを知ることができるのです。だから自分を紹介するときは、誰でも知っている公的なもの、自分を効果的に知らせることを言うことになるでしょう。環境や状況によって自分についてのことが変わることもあるでしょう。このような観点から今日の福音書の「羊飼い」という言葉を考えると、今日の福音書がよく分かるようになると思います。

今日の福音書1-2節で、イエス様はこう言われます。「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。」門を通らないということは、何を言っているのでしょうか。一般的に人々は、門を通過して出入りをしています。玄関を開けて家に入ったり、会社、お店、教会に入ったりしています。門があるのに、門ではないところから入る人は、何か他の目的がある人でしょう。今日の福音書の前の箇所には、この他の目的を持っている人々が登場します。イエス様は安息日に盲人を癒されましたが、ファリサイ派の人々は、その日が安息日だったという理由で、癒しを問題にします。しかし同時に、人を癒したということは、神様の奇跡を意味することでもあるので、ファリサイ派の人々の間では、意見が分かれました。すると、一部のユダヤ人たちは、イエス様の罪を問うために盲人が癒されたことを確認します。盲人と盲人の両親を呼び出して、何度も確認しましたが、彼らが望んでいた答えを聞くことはできませんでした。そして盲人であった人を外に追い出します。

彼らがこのようなことを起こしたのは、律法のためでした。安息日の律法を守らなかったという理由で、盲人であった者と彼の両親も呼び出して調査し、調査を通して脅かしました。彼らは、みんなの前で律法を掲げましたが、彼らの行動の裏側には、律法以外のものがありました。イエス様に罪を見つけようとする、これが彼らの目的であり、このために律法を利用し、民を脅かしたのです。しかし皮肉なことに、彼らはこのような自分たちは正しいと信じていました。自分たちの反対者の罪を問うために律法と民を利用しながらも、自分たちのことは真理を追求することだと思っていたということです。それでイエス様は「門を通らないで」と言われたのです。彼らが律法の目的と神様の御心を考慮していなかったからです。自分たちは義を行っていると思っていたが、そのことによって人々は被害を受けていました。彼らが入った所は、門ではなかったからです。イエス様はこのことを言われたのであり、門から入る者が羊飼いだと言われます。そして、これはイエス様ご自身を指すことでした。

当時の状況と環境はこうだったので、イエス様はご自分を羊飼いとして紹介されたのだと思います。律法の精神は損なわれ、神様の言葉は有名無実でした。何が真実なのか、何が正しいのかが分かりませんでした。それで、イエス様はご自分を羊飼いだと言われます。羊を導いて神様の言葉に導く羊飼い、詩編23編の言葉のように民たちを憩いの水のほとりに伴う羊飼いだと言われるのです。そして、これに対する証拠として、「羊はその声を知っているので、ついて行く(4節)」と言われます。イエス様の言葉を聞いて、ついて来る民がいるというのは、イエス様の言葉に真理があるからでしょう。真理でなければ、正しい言葉でなければ、羊は従わないでしょう。イエス様は、これをその場にいたファリサイ派の人々に言われました。しかし、ファリサイ派の人々は、イエス様の言葉が分かりませんでした。6節の言葉です。「イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。」

それでイエス様はまた言われます。7～9節の言葉です。「わたしは羊の門である。わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。」イエス様は、皆が理解できるように強くおっしゃいます。ご自分以外の人々の教えを通して得ることができるのは、盗んで奪うことになるしかないということです。門を通らなければ、つまり律法の意味と神様の御心が分からなければ、盲人だった者に起こったことが続いて繰り返されるからです。神様の癒しを喜ばず、律法に捉われることになるでしょう。そうしながらも、自分たちが行ったことは正義だと思うでしょう。それで、イエス様はご自分を羊飼い、羊の門だと言われます。イエス様が危険で間違った考え方から私たちを守り、神様に導いてくださるからです。

今日の福音書10節は、これを確定付ける言葉です。「盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」当時の状況は不安定だったと思います。ファリサイ派は律法だけを強調し、サドカイ派と貴族たちは、自分のより良い生活のためにヘロデに忠実でした。いわゆる改革派と呼ばれた熱心党は、御言葉を利用して人々を扇動し、ローマと戦うようにしました。このような状況は、人々を混乱に陥れました。何が正しいのか、何が真実なのかが分からなかったからです。それで民は、真理を盗まれ、殺され、滅ぼされました。そして、今の私たちの状況も、これとそんなに変わらないと思います。多くの情報の中で、数え切れない教えと主張の中で、私たちは混乱に陥っています。政治、経済、教育、医療など… 何一つ明確に分かりません。真理も正義も、隠されているようです。このような状況の中に生きている私たちに、イエス様はご自分が羊飼いであり、ご自分が羊の門であると言われます。

パレスチナの羊飼いは羊を守るために、羊と一緒に生活することが多かったそうです。昼間には羊を放牧して、夕方になると羊を呼んで集め、おりに入れます。そして、オオカミのような猛獣から羊たちを守るために、門のそばで泊まります。羊飼いがいることによって、羊は昼には牧草を食べ、夜には安全に休むことができるのです。イエス様はご自分を羊飼い、羊の門だと言われたのは、このように私たちを守ってくださるという意味です。何が真実なのか、何が正しいことなのかを教えてください、導いてくださるという意味です。だから、私たちは昼にも夜にも安らかに生きることができます。羊飼いであるイエス様が私たちを導き、羊の門として私たちを守ってくださるからです。今日の福音書は、一寸先も見えない私たちに向けたイエス様の言葉です。この言葉を通してイエス様の声を聞く皆様になりますように。そして、この世が与えられないイエス様の平安が皆様にありますように。イエス様の救いと命が皆様の生活の場に臨みますように、主の御名によって祈ります。アーメン